植物と人間　　生物社会のバランス　　宮脇　昭

1967年/ＮＨＫブックス　より

よりよく生きるために

生命が地球上に発生して、三十数億年の時間が経過したといわれている。そして生物系統樹の先端に咲いた一つの花のように、人類が誕生してから、わずか二百万年しかたっていない。長い生命の流れの頂点に、もっとも発達した生物としてこの世に生をうけたわれわれは、よりよく生きるために、日夜学習に、仕事にはげんでいる。しかし、その努力のすべてが、本当に明日にむかって、よりよく生きる基礎になっているだろうか。もとより現在、われわれがどのように生きてゆこうと、人間社会は当分存続するであろう。しかし、おなじ生物集団に属する、バッタや雑草の集団にみられるように、一時的に生活環境を自分たちに適するように改変しすぎ、増殖しすぎて、かえって急速に衰亡することのないように、われわれ人間は健全で持続的な発達を期したいものである。

現在、われわれの一時的欲望を満足させるための安易な生活、便利な生活のために、すぐ明日の生活基盤を失うような愚はくりかえしたくない。今日も将来も、よりよく生きるために、われわれは人間生活、人類生存の緑の基盤だけは、どれほどの犠牲を払っても、今すぐに確保しておかなければならない。

一度破壊された緑の自然は、いくら金をかけても、どのような技術を駆使しても、すぐには復元できない。たとえ見かけ上、大木を移植し、下草を植えても、高木、低木、草本、コケ植物までが、土中の小動物や微生物といっしょに、多様な動的均衡状態を保っている、その土地固有の自然林の復元には、少なくとも百年の時間を必要とする。尾瀬ヶ原の高層湿原の植生のように弱い自然植生が、一度泥岩まで流失するほど破壊された場合、その湿原植生の復元は、数百年かけても不可能に近い。

人間生活にとってなぜそれほど自然が、生きた緑の自然が必要か、残念ながらわれわれは現在ここに直接数量的に表現できない。しかしこれは、今日、なおまた現在までに、世界の研究者たちが出しえた分析的、現象的データーだけで、安易に結論を出し得るほど、表面的部分的問題ではない。それほど複雑に、直接、間接に相互に関連しあいながら、人間生活を保障しているのは緑の自然である。

人間は自然界の一員であり、生物集団の機能的、社会的な動的均衡関係のわく内でしか、生きてゆけないという冷厳な事実を、今一度、われわれは率直に認識しなければならない。

生活環境を改変し、共存者たちに絶対的に打ち勝ったときに、その生物もまた滅びるという生物社会の冷厳な秩序を理解しよう。現在すでに、われわれはあまりにも他の生物集団の構成者、よりよく生きてゆくために必要な、われわれの共存者、植物も虫も鳥も、微生物も、さらにすべての生物の生活環境も、開発、文明という命題の下で破壊しすぎ、抹殺しすぎている。

われわれが現在と将来を、健全によりよく生きるためには、人間と植物の目には見えない、多様で本質的な、そして複雑にからみあっている間接的な関係をも正しく理解すべきである。健全に生きてゆくために必要な自然の緑が、すべて、消滅しようとしているこの最後の瞬間に、勇気をもって生物のすべてを代表して自然を保全し、生物社会の均衡を維持・補償するだけの、生物としての、また人間らしい賢明さをもちたい。

現在ほど多様で、そして人間と共存共死の、不可分な関係にある緑の自然を理解し、確保する英知がすべての人たちに望まれるときは、かつて人類の歴史には一度もおとずれたことがなかった。

我々日本人は限られたこの島国で長い間にわたって、意識していたか否かは別として結果的には郷土の森に象徴される本物の自然と共存して、現在の発展をかちえた、この日本民族にとって、明日の発展の民族の潜在エネルギーの貯蔵庫として、また世界の全人類の生存の基礎としてじゅうぶんな緑の自然域の確保が、もっともさしせまった課題である。山岳地帯や海岸、湖沼、湿原など、日本のすぐれた景勝地だけでなく、われわれの日常生活している都市新交通施設やさらに新産業立地工場の中やその周辺にこそ、日常生活している住宅街の中にこそ、失われた緑の回復が強く要求される。よりよく生きるための、また健全な社会の発展のすべての基盤は、人間の本質的な共存者、自然の緑の必要性をみんなが共通に理解し、まず生きている緑の積極的な環境創造確保からはじまる。